特40
148

源氏物語講義

定價金拾錢

東京帝國大學圖書館

○まことにてさるべきよろこびなり。花盞院殿御薨御の伏案之○ほどなくさかりの云花盞院ハ仏徹底のようらぬ心を知りぬ。バ之○只いでゆえのなぬ事花の故院を思出て女房達と物語せぬ時もなし。とぞ○三條のこゝや花盞の住里亭之○此のうち桐花盞院既に崩御なれバ漸く人〻退り去る之○うげひろこの道松を院よりたまく人〻の退去することを下葉の散るといふべきハ藤ゐ廣さまといひて皆頼みし松お枯たのであらり下葉ゐ散り行

孫給へれバ。ゆよりまうせ給へらん世のまことにたるべずこうのらんを思ひ給ふるすらもなれゆえの人〻とこの世のはゐ様を思いでゆえのゆえぬときのまるきるよ。が桐花盞院よりまうしすらう。皆ほのぼのと出給よくてもなほ。この花〻きことあるべきなり」。花之ハ之條のこゝやよ極よ。この花〻きことあるべきなり」。花之ハ之條のこゝやよ

ちうりゆえ。ゆえのうちやうく人めのれゆきて志めやうなるよ。大殿こまさまるのひて。故院のこゝを聞つゝと物語之ふるきこゝのゆえ。おまへの花之ハ之物語きこゝのゆえ。立葉の松之ゐ地蓋

よ志をれて。志〻枝うれるをゐのそ。岳アマ之みと

く年の暮ギヤナアと、后女房などの外へ移りすみを歌きたるこゝ○さえ日くるの道さハ凍てる池面の氷れ鏡ハあざやうでありのまゝ見則ち故郷の序うげを見ゐ出るのゝ悲しいとぞあるとこゝ○あまり日くのくしゝゝゝ」此の歌尚坐の前ゝそのまゝをよみのべゝゝあるよ、自うらをさゝゝと忘ひのゝこゝ○とゝくれてのゝ道いそゝあハ岩井こゝ井ゝ氷れハ水ゝの涸て人の影も移らぬ池の人ゝの散りゆくて人影のまれよ散りよ

たゝこゝたりいそゝあのゝ水もとゝふ水の字よ力あり、主ハ明らけ〜○日くゝらせのゝ」中宗三條宮へ行啓の儀式こゝ○うゝりてあびのゝ山」長盃ハ池よのみ今ゝでハ池坐せ〜ゝ所よ池里亭ハ却て旅の心ち〜〜のふとこゝ

二小ノ寺五節

ぢゝく」除目ゝ春秋西度あり縣召の除目として、國々の司昇進〜又新に任せらゝ〜もあり○とのゐゐのゝふくゝ」宿直の夜具を入袋ゝ添の威勢の義ゝ宿直の人ゝ少ゝ人ゝ是を旧注

昔に変らぬゝ三條宮こゝ

ゝてあびのゝ山ち〜〜のゝ水ゝ帝ゝ池ゝ帝の池ゝ恋あとゝ年月のとゝこゝ

月のほど。めぐりてぞ〜」二小殿の御四節こゝ池の所四十九日も清て人ゝ

外ゝへ退り散る状を叙せり。桐壺帝崩御の餘波こゝ。とゝ〜のゝうぬれど世中いとあ

ゝきとゝなゝ〜きづつなり。大殿ハ御のゝくてこ

りゐゝ泣ゝ。ぢもくのゝこゝろなどゝ。池の所時をぶさ

らゝもいそゝび。どゝ〜どゝろやとるけちめなくて。みゐ

門おのゝこゝ

どのゝ。ゝゝ。とゝろなくたちこみゝるとゝ〜ゝ

ゝとゝぎそ。とのゐるものゝふくゝろをゝ〜みえび。出

家司

ゝきけ〜ゝたゝりゝとゝいそぐとなげそあるを

に三個の秘事あるなど云ふハ甚非也○まことにいそぐことなげにて」家司などの閑服あるを源の見かひて、今よりハかやうなるべしと思ひめぐらし

二ノ才六節

院の御思ひに」院の御為に時の尚侍ハ尼になりて、今其欠員に朧月夜任ぜられたるなり
后ハさしもおぼしたり」弘徽殿の大后ハ里住がちにて参内の時ハ梅壺を局としてもちゐ○こき殿にハ」是まで后の御曹司なる弘徽殿に今ハ朧月住みて、梅壺ハ弘徽殿の西に

うちなみなみ。いまよりハかくこそハと思ひやられて。もの心ぼそくなむ」二ノ段の才五節之。大后殿の一門前始めてさびしきさまを叙せり。みくしげどのハ。二月にないしのかみになりぬ」院の御思ひに。やがてあまになりたまへるかはりなりけり」。やんごとなくもてなして。人がらもいとよくおはすれば。あまたまゐりあつまりたまふ中にも。すぐれてときめきたまふ。后ハさとがちにおはしまして。まゐりたまふ時の御つぼねには。梅つぼをしたれば。こきでんにはかんのきみすみたまふ。とうくわでんのうもれたりつるに。はれ／＼しうなりて。女房なども数しら

あり登花殿ハ、弘徽殿の並の北にあり○いまめかしう」眼目之、当世風にする也○思ひの外なり」彼の源と密通のことも○いと忍びて」源と朧月夜との文ハ通ひしなるべし○あやうけれ也」源の身之、今ハ大后あたりへのゆえ如何と思ひしなるべし

二ノ才七節

院のおはしまし」桐帝の在坐しつる時ハ憚りあひしを、今ハ大后ハ御心のまゝ之とのさえ○かたかく」おぼしつめたる」大后いろ／＼の恨みのことをおぼし集めて也○

ずつどひまゐりて。いまめかしうはなやぎたまへど。御こころのうちハ。思ひの外なりしことどもを忘れがたうなげきたまふ。いと忍びてかよはしたまふことハ。なほおなじさまなるべし。ものゝきこえもあらば。いかならんとおぼしながら。例の御くせなれば。いましも御心ざしまさるべかめり」二ノ段の才六節之。弘徽殿の大后時を得の状之。院のおはしましつる世こそはゞかりつれ。后の御心いちはやくて。かた／＼おぼしつめたることどものむくいせんとおぼすべかめり。ことにふれてはしたなきことのみいでくれば。かゝるべきことゝは

かくるべきすべとは源心よかやうの事よあらんとは知りもよへども○まさまさきんちは左大臣も時を失なへる心ちしてそ○こ姫君を葵上を朱雀院の望ませのひしを奉らびして源よ奉りしそ○ものとぐの院中も葵の父左大臣と弘徽殿の父右大臣との院中そ○そばそばしうそばハ觚稜そ能立て院中のようちぬそ○時うつりてそ今右大臣の執権なれば○あぐまきそ○ものとりあくなれそ○ものとりあよひ源ハ相変らび左

ものはしくかどみそりのふぬ世のうさよ。たちまへべくもものはされぞ。左の御ほんとのもとさまさきんちしのそ。ようちもやまるり給そび。こ姫君をひきまぎそこの大殿の君よゆえつけのひしほんを。后ハ御ものはしくもきそ。よろもうくも思ひゆえのそび。ものとぐの院中ももとよりそばくしうものそそよ。左の院の院世そ左大臣のまもまよものそしを。時移りて世そりぬほよものふもそる。大殿を。左大臣のまもあちまきそ。葵の女房とものはしくよかそらびとそりかそひのそ。さふらひ人ぐをも。中葵の五世の時そうハ事て親切よ扱すそ夕霧そこまそうよものはしくきそ。ものとの君を

大臣方へ流り通ひるそ○ものとぐいそづき甚イタハルそ源の親切なるをそ左大臣も源を大切よいそはりやづきのふとと以前よかそらしそ

二小ノ弟八節

院御所天のあまり源ハ故院のときよ院寵愛ありしのば院威光たぐひなくて物騒ぐしの夕の暇なきそ○あんなるハ合ヒナクそ○少納言紫上の乳母そ○ものとへの北山の尼君そ佛よ紫の上の幸を祈りのひしそ

かづき見ひゆえのへることのぎりなければあいれよりぐきそ心とものとぐいそびきゆえのふことどもおなぐしさ院のり。左大臣

二小段の弟七節そ。弘徽殿ぐしの院威勢まいしく盛なる状なり。

かぎりなきさ院御所えのあまりものさるぐきまで。源そ

いとはるげよりそえのしをかよひのひしふくもかぐよ。源のそ

ものえのふとぐもなりるぐきさ院まのびありきる。

あんなるう御所なりてとよ吉のふねだいとのどやうよい。きさ院の院ありさまそ

かそらるるきさ院ありさ院のり。紫上そ

ましもあらまきさ院ありさ院のり」西のたんの姫君の院さんたひを。世の人なめでゆ。少納そなども。人吉れびこあまうへの院いのりけるしとそる。

○ちゝみこ」紫上も父兵部卿宮に御対面あるべし○むかしのひだりの云々」むかしのひだりふハ嫡妻之、兵部卿宮の嫡妻の腹の息達ハ紫のやうに幸ハなくてなり○ねたげなる」嫡妻ハ妬ましきこと多くてなり○むかし物語」旧本ニ物語とあり、今異本及び湖月に據る之、昔物語に、母と姫君とまゝしきなかのことをかきたるが多くあれど、今嫡妻と紫上との仲らひも是に似たりとなり、

三小ノ第一節

朱雀院」是ハ桐壺帝の第三の皇子之、女三宮

(地)ちゝみこも思ふさまにおぼえあらんしも。むかしのひだりの(兵部卿之)かぎりなりけれども、おぼゆるにくしともえあらぬに。ねたげなること多くて。はゝのかなしさは。やまとのうらびにおぼすべし。むかし物語にことさらに作りいでたるやうなる御有様なり』二小段の第八節之。源ハ時思ひ通ひも止みて。二條院にこもりおはしまし。是迄を二小段とし、此の段院の崩御の後弘徽殿方ハいよいよ威勢をふるひ、大将の君の方ハ人々ものさびしげになりゆく状を叙したるハ。物の盛衰を示して(是より朱雀院の事之)くらべて世の中ハかくあるものぞと。今をも見て後をいましむべききさまにかきなされたるなり。(朱雀院之)ましますは御かくれにもなりて(孫王之)(かたぎよ)權の姫君ハかくれよなりたまひき。かくれいつきまはそのみなる例多くもあらざりけれども、べき女みこや

と申す御方之、院の御位を下りたまふ之○あさおほの姫」君」桐帝の御姪にて桃園式部卿宮の御女之、女三宮に代りて斎院に立ちたまふ之○そのうちのみこ」母」加茂の斎院にハ當代に皇女なければ皇孫女の立ちたまふ例之、故に多くもあらしといふ之○かやうのたぐひ」ど權なるのたぐひなきさまをのみ源ハ隙なるまゝにおぼしなやむとなり

三小ノ才二節

院の御遺言」桐壺帝より源をおろそかにおもふまじと朱雀院へ御遺言ありし之○御心な

おはせざりけん」。大后の君(源ハ右權を見の君ハ之)とし月ふれど。なほ御心ハなれぬなりけりを。かくすぢことなりぬるひぬれバ(思かけなく斎院に立ちたまひのえバ之)(權の方の女房之)をしとおぼす」。中ねるにおもてくれのふことおぼいてきこそ。(地)御ふみなども。たえざる」べし。(源の今の御身之)むそのしよかはする事あり。さは(?)などをたてまつるにおぼしまさりて。さらにもやうのたぐひなどもあらしさまにておはします。(院の方)なよやめり』三小段の第一節之。女三の宮斎院を下りのひて權れにたうましとおぼし。姫君かはりて加茂の斎院に立ちたまふことを叙せり。みかどハ院の御遺言たがへず(源をも)あはれにおぼしたれど。(地、朱雀帝之)おもうしますにも。御心なよびたるかたにすぎて。つよきところおはしまさ

よびたる」柔和に過て、〇おほぢ（祖父）おほぢ（大祖父）祖父に仏徹（仏徹大臣）右大臣に〇とりぐ（取々）「大后や右大臣の心のまゝに執り行ひぬふ政たに」

三小ノ才三節

かんの君は」朧月夜の尚侍の心は源ようふ（様子）に〇五ごんのみぢは「五大明王の法を修めらるゝを五壇御修法（ごだんみしゅほう）といふに〇例の義のやう」源忍びて朧月夜に逢ふに〇うの（宇佐）の廊（ろう）にて、昔源が始て朧月夜に逢のひを思ふに〇宮（朧月の方の女房）

ぬなるべし。母（仏徹大臣）きさき（紀）。おほぢ（祖父）おほぢ（大祖父）。とりぐ（取々）によるふ（様子）。えそむきのふじ。代のまつりごと（朱雀の政）は心よこのゑ（朱雀の）ぬやうなり。

三小段の才二節に朱雀院の内本性の状を叙せるなり。

つらゝ（辛）きのみまされど。かんの君は人きれぬはんぞ（半ば）かに（ばかりに）ヒマガナイトテモ。おぼつ（遠ク）のゝくは（ばかり）あらじ。五ごんのみぞ（御）ほうし（法師）めと（初目）にて。つく（朱雀の慎）しみ（慎み）まゝ（ひまひま）うのぶ（ひて）。例の義のやう（様）にきこえのふ。この昔おぼえ（覚え）うる（得る）ほどと人めも（目も）ちげ（違ひ）きにたれど。つねより（常より）ものなるを。宮（朧月の方の女房）の（の）状（様）にはおぼ（覚）えず（ず）。

廿八号五

「何とかく（如）ばかり」きえ（消）〇おもりこの（重）なるかさ（笠）ハ「朧月夜ハ」おもゝ（重）くしき本性に（に）あらじとえ（得）〇おもう（思）うなるめき（目き）ヨクウルハシクシテ（正）〇ひ（日）のびさ（差）「さのゝくしき（清き）やうす（様）〇たゞ（ただ）こゝ（ここ）ろ（心）「近衛の官人此の辺に宿直して申（申し）に〇まゝ（ままに）こゝろ（心）「源ハ是をきて、又此の辺に次将なるどの隠れて人をらんと思ほすなり〇とらひと（虎人）「寅刻ハ午前四時に一刻を四つに分ちて、一つ二つ三つ四つといふに〇心の

あれば。まして女ぢらしきほどよりはをあるほたいめ（対面）のあるハ物ろ（物憂）からん」。女（朧の）ほ（ほど）ゆもげ（ゆもげ）ぞめでたきほど（ほど）はあり（有）る」。おもりこのなるかさ（笠）いとゞ（いとど）あらん。をこうなめきこと（目き事）びしることちしてみまほ（見まほ）しきけをひなり。ほど（ほのひそうに）ゆくあけゆくまやと。おぼゆるまに（に）こゝよ（ここよ）もとのゐやしきふら（ふら）ことづくるなりまこのゝ（ゝ）ゝ（ゝ）よかくろへ（くろへ）ることみ（見）づのきぞ（きぞ）あるべき。はちぢ（イデワロキ）なきこゝ（傍輩に）のをこへ（ヨコシク）おそ（そ）ぞこう（ヨコシク）。と大ゐ（大ゐ又ハ中ゐ）ハきく（聞く）。をこう（ヨコシク）きものゝらこづら（メンドウに）ハしこと（朧に）かしこたづねありきて。とらひと（虎人）にて（にて）なり。女君

らの「ゑ」さハ心ぶらりよ彼是よつけて袖をぬらんとぞある袋ぶりくといふのと人ぶ飽きたといふのとそのニつの夢よつけてマアとゑ、宿直申しの夢よつけてかくいふゑ○なげきつゝの「ゑ」さハ歎きろ〳〵我ぶ一生ハかゝゝして過ぐせとまやあらん、胸のせゝくとまぐき時もあれどゑ○ちげ心ちくて「心せハゝくてゑ、

三小ノ才四節

夜ふのきちゝ「花の宴の巻の照夏ゑ○承香殿左大臣の女うて、朱雀院の女御となるを

心うらかるゝ神をぬらすなるなくとをしふる

夢よつけて「ゑ」。

なげきつゝかゝるゑ世ハかゝてきぐせとやむぬのあくぐき時そとやなく」。ちげ心ちくていでのひぬ

段の才三節ゑ。源氏の君ゑ。夜ふのきあの川き月夜の。

ひて朧月夜よ逢ふ状ゑ。

えもいいそぐきりてされるよいといあやつれて

ふるゆびゝ

承香殿の御せうとの兄人ゑ中ねふぢつほより出で。月のすゝゝ

源のゑ雲のゆくりなくゑ立節あるたてちゝみのすとよゝそりけるを。

ちらでちぎ弱ひりんこそいとほゝけれ。おどきゆ

入ゑ、その西兄弟の頭中将ゑ○ゆどきゆゆる云ゝ」。中ねふ付て源をそちるちんとゑ、是須广のほうつろひの伏案ゑ○ゑんのひくかゝ」。我心の引うるるかゝとい。ふよ同ド

三小ノ才五節

うひゝゝゝゝゝゝゝゝ」。

花宴ハ系内まるゝを恥ふゝくキウクツニ思ひてゑ○表宴を云ゝ」。冷泉院を見まらぬを心配ふ思ふゑ○なほこのゝゝきほゝ」。ヤハリ彼の花を愁恋まる心の止まぬゆゑまゑ○ひさくこのも気色を」。桐壺帝ハゆゝゝ

ゆるやいいいりもありもむゝ」。源のかやうのゝとつけてもそまれつれちきゝ人の心をうつめでたゝと思ひゆえ。ふものうち。ふ心のひくゝるゝていちるほつちういし

と知ぼえすゝ」をゝり知ぼうり」。三小段の才四節ゑ。大将の君。月夜の許より出るゝをう。ヤハリ花宴をゝ。中ねふ見付られ是より花宴のゝゝ。

すゝ状を叙せり。内よまゝり花ぞんとふ。ひゝゝゝゝゝゝゝ。

知ぼゝなりて。表やゝをとみてまつり角まえぬを知ぼつゝ

なくゝ知ぼえすゝ」。又ゝ花の影むべきゝ人ゝ物ゝ花ぞぬ。

じこの大将の君源氏をそよろげよたのみゆえのゝゝ。

ほこのゝくきほゝんのやまぬゝ。ヤハモスレバゝ。とゝもそれバ胸ゑ。

ぶゝ花ひつ。いゝくこのも気色ケしきを。ほゝんじちぐちゝ

源と為朝と密通の気色を時ぞんじ奇くて崩所ありしを〇思ふ〇思ふのよデモ〇今度よまさるとと〇今改めて又左やうの密通のうハさぞありてハと〇所祈りをさへ〇為ハひそかのよ源の為めよ神佛を祈りて源の愁恋の心の止むやうよと思ふと〇あさましーうてちと〇トンダメイワクのるで為朝ハ源よ逢ひめへるとと〇まねびやうも奇く〇眼目と此所へ寫して加きやうも奇く源ぞ羽をつくして為朝よいひまりめへ

しを。思ふ。ぶよいと却そろしきよ。今ろよまさるとの。ゆえありて。為朝。あ。ハさるものとて。冷泉。カマハヌガ。玄中の所しあよ。

のるならびようちぬといできるんとおぼまよいとおそろしけれバ。陰形をさへせうせのひてげと思ひやませてまちんと。おぼしいさらぬとなくのぶれめよを。

いのるをうまのみちん。あさましーうて近づきまり。為の女房も去らぬ。のへり。源の屋くけりてたぞこのり形ひちんことを去るへなるうり

れバ。為の心ハ。為の心ハ。為朝のやうまぞみるまねぶべきやうも奇く。ゆえつぐけのへ。ど。為朝。いとこよるくゆてをるれゆえ

のひて。をそ。くいハ陰むぬをいてうをやこ形へぶちの

どん〇所むねをいてう。為ハ餘り心配して癪が起るぞのりるれぞ〇あさましーう。驚歎しちん〇まーかさう。前後の考も奇く心くらみてん〇うつ。現の心もなくありてん、下よ照応、

三小ノ才六郎

ぬりごめ。塗込ん。今のあーいれの如きふん〇所ぞこと。源の所為ん〇所先あぶりて。為朝の姿あまりよん配をゆひて所先の上りたるん、上のかむぬをいてうたるもこのへべとある照応〇傍めせ。加持の傍を呂ん

為の傍り居る女房。うさふらひつる命ぬ。弟。やどぞ。あさましーうん。為朝つかふ。語ん。をとこはうーつちーと思ひゆえのよを恨り奇きよ。きーかさゆくさ死のきくらんちーてう。ついいも

いいせよけれバ。夜おけるん。あけまてよけれど。いでまぶぐりぬ。三小段の才五郎ん。大和の名為朝の姿よ見びて。為朝。陰なやこよ。おどろきて。くちのう系りて去げうまどへバ。為ん。れるもあらぬぬりごめよ

あーいれられてあるん。ほぞこるかくーもたる人のんちどもいとむりこの。為ん。ふものをいとるびーとおぼ去けるよ。所先。あぶりて。なほなやまーうせさせ給へ。

兵部。ひやうぶ。まろうのみやたよ。大夫。など系りて。僧めせるどさるぐを。為ん大和

○おこそりのめくる」若の法をやこ平癒したるえ○かくこもり」源おかくこもり居のろんとハ、若盍ハ知りのろぬえ○かくこもんとも」源おかくおろ〜まんとも申さぬえ○よろ〜しうおぼさるる」内悩平癒なら んとてえ○れいのけちうくるらせのよ」若ハ常ともも近く馴れさせのふ人お少きえ○こよひさえ云〜」上の照度え、若盍ハ昨夜も内気あぐりのひしよ、又源を見るるぐ、今夜さへ内気あぐりのろんとて、女房達ん祝きるえ、

いとヨびしうゆおそすからうして寄りほどぞ
おこそりのくる。かくこもりる孫へらんとハおぼしもか
けど。比人こもも又内ハ若のえまどハさでこそかくこもんともやさ
ぬなるべし」。若えひるのあましよいざり生て御ーまんよ。藤行え
ろうおぼさるてなりとて。兵ろえおもまで孫なるべて。若のえ
御まえ人きくあるよなりぬ。れいもけちのくるらさせのふ
人きくなければ。若の女房達えかくこれものくうちろなどこそ
さふらふ」。命ぬのえなるべ。源を中ーのーきんとえいのよたぞこりて生ーを
んこそひさえ内ハけあぐらせ孫ぞんいとほしうなど
小声ニテ私ニ云ふえ
うちさめきあつうふ」

三ハ段の第六節え。若盍の宮大殿を云て内悩起りるふ状え。

三ハノ第七節

御屏風のそぎ出」四屏風のあひだえ○若きりのふ」源の若をみのふえ○怪いとこそ」若のひとりごとよのふえ○世やつきぬらん」引歌えあふぎりし涙のもろく紅ろくハ世やつきぬらんとかりえ主ハ違ハるんでありー主涙のもろく成てきたのハ、我世おつきたのであらう、系おお死ぬべき時節おきたのであらうとえ、若ハかく歌きのひて、外の方をえ見ーのくるえ○かんぞーかーらつき」髪きみハぬりごめれ戸のほそめよあきたるを。やどちおしあけて。内屏風のそぎ出よつるひ入りのぬめづらきくうれしきよみなるぐハ内ちそいんまりのふ。怪いとこそ」世やつきぬらんとて。外えれいとこそ」。源のえうるさをいんとのくるかさらめいひしらびあまめかーうえ出。内くぐ菓子えめをだよとそまるりまを急たり。若の内おりまえ菓子おえきさはあてあれど。若ハえれのふ。世の中をいとう御風ーるやめる気色そのどうよなるめいりのくるぷ。若ハ内ハ孫の飾伏案ハのーニえいとう御風ーるやめる気色そのどうよなるめいりのくるぷ。カハユラシケらうたげなり」。髪のもものうーかりなきまま。かんぞーかーらつき」髪のかーりたるさ高根ぶきー

差頭付ん、君の御髪よりも頭のやうにん○
まほいーさなどぞ。あぢかのこんの姫君よりぞ〳〵「玉鬘」。
「ほいーさ」ウツクシサん○年頃ぞ」源の君を思ひの人りつるを
ん○あさましーきまで」
年頃はさこそ思ひきれもくりつるを。あさましーきまで
でおぼえのくるよる。みのまくよ。はそこそ
驚くばかりに驚くまで紫上に似てゐるよ
と源の君を見るん
○さらにこと人とは思ひもよらぬ
他人とは思ひもよらぬと同じやうなる○
さまことに」紫よりハ殊更ん○ねびまさり」とのひてゐるあ
しきん○ほんまどひきて」眼見ん○やをちみ帳のうちに」源の
ロソロトと君の御帳のうちに入りのひてん
紫ヲ見テ若君
容貌ノ美ナルニ
恋心ノ晴ルヽン
なるさまあるどもさらにこと人とは思ひもよらぬ。
なほおぎりなく。若君より思ひ出でゆえてーんの思
ひなーしーや。さはなこと。いとうねびまさりのひ
ようけるなる。とたぐひなくおぼえのふよ。ほんまもど
ひーて。やをちみ帳のうちよりめづらしいて。ほんぞ
のつまゆひきちらーぢ。けそひまさりさと白ひたる

○さと白ひたる」源
のたきものの香ん○えだよりもきの
へねうー」源ん君の
方を見むきでも
ーあきて」脇きスベラ
スん○ぐーのとり
ぞくられ」君の御髪の
源のうりのふ御衣を取
り添くてひすれのふ
ん○ぐくせのほど」か
く憂き目にあふも宿
縁なるんと、自つからを
恨みのふん○うり
ら世を云」源ハ年頃
つーしみたるんも乱
れてん是ハ眼見ん○
たぐんちの云」君の
源をぞうーのふ涙ん

○君ハ源ん
よあさまーうむくつけうおぼされてやうでひれふ
しーのくり」源ん
くて。君の御衣をん
りのきぬふよ。ん
れうりけれぱいとん
られて。いとーぢとおぼーう。君ん
をもて出づめのふ御ほんまみぐれてうんしぢは
思ひ慰せうり
ふもあらぢ。よろづのことをなくくうらみゆえの
へど。君ハんん
えのそぞず。たぐんちのいとまやまーきぬ。うらぬ

○まをごのよみ」まをすごのよハ俗シカシナガラこゝ、君ハ源の渕の後耳まとまることゝもまじるべしとぞ○何らぎまじとゝは」君ハ一度道ならぬことハなしたれど改めて堅く辞(イナ)ミなまふ○こゝろもあけゆく」上の第五節よ実事なくて明けなてたるさまなれバ、此所よこゝろひもといふ之

三小ノ第八節

せめてこゝ」君壷のこと、をさけける渕よ志ひて従ハぬも恐れあることゝ○おほけなきんも侍らじ」過分の願いなしとのさまなり○

をりもあらバ聞えてんとのたまへど。つきせぬ御こゝろのほどをいひつゞけ給ふ。とき〳〵ぬ〳〵しもまじるらん何らざりしことにはあらねど。何らためていとをしうおぼさるれバ。なつかしき物うらとようの様ひのつれてこよひもあけゆく」

三小段の第七節之。大将の君ぬりてめより出て。さまざまの事を君壷よ

ゆえあげのふ状之。せめてさてのひゆえざらんもかたじけなく。ん〳〵のしき情けなくひるれバ。たゞこのりまでもときどきいそしきられへをたまへるけ侍りぬべく。なよの御ほけなきなんも侍らじ。さどゆめゆえ

なのめなることだに」至ひよ十分ならば思ふならまそれも之○世中にありときこし」この世になおらふるも面目なく又死なんと思ひても彼是にかゝることなどありていふるせましとる之○あふとの歌」此の歌に付てきまく〳〵の説あれど、さほどよむづかしき歌よあらず、さハ逢ことの難いのを今日に限らなんならず未世も未〳〵世も親も恨み数きつゝ経るぞアラウ、然(サ)ちバあるた様のほどしるもなるそであらうと歌より直(スグ)に渕よつゞけて

のたまふべし」。此なのめなることだにかやうなるならひハ。あはれなることもそふなるをましてめづらしげなり」。あけぬれバふりすてゝいとゞきこゆるもをゆえ。君ハなつかしきやうなる御けしきの心ぐるしけれバ。世中にありときこしめされんもいとゞつゝましけれバ。やすらひ侍りなん。又この世ならぬつゝましさ侍りぬべきことなどゆえのさかなむくつけき(オソロシキ)までおぼしいれり。

あふことのかたき数をば今はいくよをのなげきつゝへむ。ほどしるもこそとゆえ

又ぐきん○すぐき世のの道上の命よりかたきとあるを獻よとりなしてよみめくるに、きハ永き世の源の恨を我が身の上よ殘してもそれハ據なれど、カタデマニハ源が自分の心を獻んと知りのへとん是ハ古今六帖よりこそ心をえうるるなれ心のあさハ心なりけり」とあれバ源ハ未ぐんよ此方のことを惡ひのへバこそ恨るすれ心のもちやうこそ我心ぐの為ぐ獻とするぞと知ぼせと為の諫めのまに

三小ノ第九節

の人バ。若のさきそのようちなげきくあるひく。

若すぐき世のうらみを人よのこしてあるの川ハんを

獻んと

あくしと思らるん。たのなくいひなさをめくるさまの。

源ハんうとすきん

いふよしなきんちはれど。人の知ぼさんあるひとの法

源自分の為

あめもくくるしけれバ。これまるあらでいぞのひぬ

三小段のの第八節。若者の思ハつれなくくのこもて

源ハの心

ハ。大ねの君ぞるあらで立出すん状。いづこを

源ハ面目ようぞ

知てよこうはまるるみえ若らん。いとほしとおぼ

源ハ

しるぞるありとおぼして。源ハふこるもきこえのふず。

源ハ米賣殿ハ

うちあえてうちまゐ客るまゐり給ぞ。二條殿ハ

源ハ

知ぼして。おきふしいこどかりけるんの法のの。

源ハ

廿八号十一

世よふれバうぐおん古今集よ世よふれバうきこそまされみ

のくに岩ぬけうけみちふこそ世を道れんとおぼす。源ハ世を道れんとおぼすん○おもるのるぐり信乳のあぐり志名殺ぐいまぐ平生のやうこそ知ぞくーまきぬ上の第六節の照為。○命ぬなぐ王命ぬなぐ源のことを思きのどくよ思ふん○こやもまるの云是より為書のいろくよ心配しのよさまを地よう密していふん○周心知き為をん為の今よ源が見為

と人ところく意ーうのなーきよこ為ぬまーひ

もうせよこそまるやまーうえ知ぼさる」知のん

ぼそくなぐやせよふれバうさこそまきれと知ぼーたろ

ふ。この女源ハのいこらうーけて。義ようちこのを

きこえ為へるを。ふりまそんこといこのこー。為ぬ

ないなぐり為ハいふ知ふーまきず。かうここらめ

きて為ハのこりるぬこれぬまふぬを。命ぬなぐふ

いこほーぐりきこ思。為ん今泉之ぬまの法ーめを知

ぼそふ。法ん知き為をんこといこほーく。為ん世をあぐきツマラ

なきものよ思ひこり為をぐ。ヒトスギニ道せつん知ぼーた

よ所隔てあらぶいとぐせんと思きのどくよ。おぼすん。○あ〜ゑ〜と きこえは」中宮職の上、后宮の大后を差こて后妃をたてのひ を遺恨よ思ひてあるあと。○くらゐをゆさうりなん」后の御后飾の伏業の三と。○恨のおぼ」桐帝ご寿宴の後見よ中宮をたてゐひ〜をうひゆなきせなりとあ欲きのこと。○戚夫人」漢の高祖の妾趙王如意の母と、高祖崩後呂大后の為よ人彘と呼バれ〜と呂后本紀よあり。○うと きこ〜ぐ〜が〜と」

いしとゆやと。さをぞよくてこ〜うおぼさるべ〜ゆく。密通のこと。ることあるを上ぶハ。いとぐ〜き世よ。うきゆ名えゆりいでそうん。仏教の大后と。きさきのあるまじきことよの御ふるる。（中宮職）くらゐをゆきりなんとやうく〜おぼ〜ゆ。御のおぼ〜の御をせ〜さ海の。なれめ（十分）ならぎる。

ぼ〜を。おぼ〜出ることゆよろびのことなりしまゆあらぶ。うそうゆく世よこそあめれ。戚夫人のみ（うきめ）ゆむめれ。やうよこそあらぶとゆ。のゆらぶひとよりらくへなることよ。ありぬべき身よこそあめれなどう。おぼ〜ゆ。おぼさるれバそむ

ゑハかくそハ世をそ ぐ〜難〜とおぼくく。○そむきゆん」とおぼくく。ハ出家せんと思ふくと。下よ思ふ。○（意味）ゑハ御姿をかくぬうちよ。今一度寿宴をゑをらんと思ひて参内〜ゆへ〜〜。

三小ノ第十節

御おくり」中宮のり啓の御送りん。○むげよおぼ〜〜〜よけ〜むげハ無限と。源の心を寄〜て女房達おいみ〜〜〜ハ屈と。源の御心の先日の恨、かぎりなく屈〜て居のふを思きのどくよ思と。

きゆんことをおぼ〜いいとよ。宴こそまつらでおもかをりせんことあをれよおぼさるれバ。思びやのよてまゆりのくり。（三小段の第九節。大殿の矢后宮の中宮を恨みのふ。中宮思ひて参内〜て。寿宴を見たまふをを叙せり。）大殿の矢ハさらぬとだよおぼしようらぬことるく。御心よおぼつけて。御心よおぼ〜ふまり御ふを。御心ゆ思ふ。ちゆやまきよとつけて。御心よおぼくり上ゆまゆりめそ。おぼ

平生のこと。ふらひハ御れ〜やうれど。おげよおぼ〜〜よけ〜と。（今出来たること）ん考るどちハいとほ〜ごり多四。

（寿宴六戈）ゑハいみ〜ごうゆ〜〜ゆとゆびのひてめづちゆ〜〜〜ゆとおぼ〜て。（后宮）むつれきこえのよ。（中宮）の

○おぼ〜たろ中ぢう」上のそむきうんとおぼ〜とろとろ思ふ人、出家を思立つと○うちとうとうをみやつて」内裡を若ごつかうとて手さきのむすう〜ようりたるをいふ○「お入のふつかも」若の禁中へ出入のふつかも○中の所ためうも」若の所為うもあ〜きと、大后若を思ふなふあまりよ、若きの所上てかも異変のあらんとゆく〜ゆおぼすん○閉らんぜで」若蓋御落飾の伝業の四と○うとそ」轉と同ド俗カヘリ〜ん○けの所ようなる

なぼ〜とうんたてまつり給ふまも。おぼ〜たつぢはいとこのごとげすれど。うちとうとうをみ給ふつけても。世のありさはあきれよ。そのなくうつりかたることのこおぼうり」。おぼはきさきの所ころもいとづらはしくて。お入のふつかもたく。ことよふれてくるければ。やの時ふめつもあやふく。ゆく〜しうよろりまつけておぼ〜こぶれて。若の手紙へ中納言の所らんぜで和さ〜のらん思どよかくちのとぶ所いそうそけようふりて侍らば。いとのぐ。おぼまるべきとゆえふめへで。若蓋の所のこのほをみのひてそうちまのりのて。

ようりて」けハ藝之つねよ変り侍らぶといふこと○式アおやうりや」式アとて老たる女房あるん故よ寿まいおて然あらんとのふん○よのそ」夜居僧之内裡の二間よさふらひて祈もまのら加持まる僧之○なぐのおつれば」春去所涙の流れぐ、をそうきぢんよまづうー とおぼまん○そむきのへ」背ヲ向クルナ之○閉ぐ〜ハゆら〜」毒蛇の所髪のさ侍ん毛のふまもおまそゆら〜まるん○たぐのの所ろをを」只

式アおやうりや。式アのの所別のでのさはありのんとろて。若侍心まえのふ。いふうひなくあそれて。それハおんて侍れバこよくまぐぞ。○式アうやうよ年よるまハあちぞえ。さはあらぐかくハそれよりもみぐこのくて。黒衣之くろきさきぬなどをきてよるのそうのやうなり侍らんとまれば。こそてまつらんこと。絶間あべきこと。いとぐひさしうるべきぐとて。なきぐ〜ふへだまめだちて。久しう申せぬば。若〜きさのをとて。ぎぐのおつれば。ぐ〜とおぼ〜てさまどのよそむきのへる。シカシナガラニ。ぐ〜ハゆら〜ときまらて。まうのるのしげよ白ひのへるさ侍。おとるびぢふまく。たぐのの

大君の内裏よりおくれ
のつとめ○内裏の云々春宮の内侍歯の状
子供の乳歯をどい
つゝハ、大のさハ少し
拓て口中黒みて又ゆる
し○女房て云々若ハ
春宮のうつくしきを
又をりて、女房てまさ
ばいうゝハ
ちんと見るゝ○い
とかうしも云々甚ざ
かやうに似てう
つくしきを却て玉の
瑕瑾のやうにおぼさ
るゝも、世間の人の評
判おもゝしきよ、さや
うにおぼさであらう、
さゝ中宮の今の内
心づかひハ、げにいと

内侍のをぬぎ給ひ
くちのうちくろみて。
きは。女房云々
おぼえのくるそんうけれと。
きずにおぼさるゝ。世のとゞちさ
あうはゞ見給ふ『
三小段の第十節。春宮の中宮
宮を又をりていと表な
ひ。且ハ世中変りよたれバ。今ハ殊更に世のもどきをも恐れ。
春宮大君の夫の内侍をもやぼ
そませ。いとゝかしこ
うの深き内侍
ハあらねど。つひに内侍
の内侍のとゞのあるハいと口をし

廿八号十四

内侍ゝきとゝと、ようわ
目ゝも又ゆるさゝをを
かきあらたされたる、
あこのゞ妙巧なる筆力
なりけり

四小段第一節

あさきゝ内侍の
の驚くゞのりつれな
うりし内侍を思ひ出
らせまつらんとて、源
ハつぎとまるゝも系
らざりしに○つれ〳〵
タイクツに○霊林院
淳和天皇の離宮に、後
に僧正遍昭是を賜ま
りて寺とおこり紫野
にあり○律師僧官に
ゞ人ハ系図に更衣の
弟とし、按察大納言に
子に弟をも兄人と云

きとゝと誰も思ひ
なれバ。いとをぐれて賢かるし大君の夫をこそ。若き人のつね
ちの内侍をしを去あるして。さて若き人ハ男をみるも。此の段を
大方ようみをぐさで。いとゝ慎むべきとゝと戒めたる筆つのひに。
大君の君ハ。やをいとこひしう思ひ給へ
きに内侍の思ひを。時々を思ひ出るさ法ゝもせた
てまつらんと。初んにつまぐしに移ふよ。人ろくつ
れ〳〵に思ひまるれバ。秋の野もこ移ひぞてち。林
みんにまるでるゝまゝり。故母君息子の内侍せうとの
律師のこゝろうたまつる坊して。法文などよみおこな
ひせんとおぼして。二三日おこたるよ。あそれなる
こと思ひ給へり。秋の景色
りみぢのやり〳〵いろづきまさり

ふい古の習俗と○初うら」添ぶ寺よませをと○つねなさ」無常と○うきく」もぞ」うき人と、孟津よ、天戸をおしぶ〳〵の月これなうき人ちもぞ亭〳〵かりりる、とあり、添花書を考〳〵と思出らる〳〵と○おしあけぶ〳〵」おしハ添言と本家の詞をとりてかけり○あ」閑伽と、佛よ奉る水花どもをいふと○きく の花ゐ」見ハ時花とて、を時〳〵の花紅葉を佛よ奉ると○さもあぢきなき身」添のみづうら感歎しのふ拭と、然マア何のこけもなき

て。秋の野辺にいとなつめきたるなどとあるひつ。ぬるさとも京のそれぬぐ〳〵ぬぐる」法師ぞらのざえあるかぎりめ〳〵いぞ〳〵。編義きさせて〳〵」添ゑ」めさせ給ふ。おのらよいと〳〵世の中はつねなきをおぼ〳〵あり。なほうきく人〳〵もぞと思ぼ〳〵出らる〳〵。おしあけぶ〳〵の月こげよ」法師達などりて同トあうたてまつるとて。袈裟を洗ふまと の花こきうをおしみぢなどをうちら〳〵たるもまうなけれど。この佛達のそと かくのいとなつ、ぶ世もつれ〳〵ならじ。後の世をとたのもしげなり。さもほのそあぢきなき

明治十七年五月廿五日版権免許
仝廿一年十月廿日印刷
仝廿一年十月廿一日出版

校閲者 東京府平民 黒川真頼 東京浅草区小島町二十八番地

講義者 東京府士族 鈴木弘恭 同小石川区竹早町十三番地

筆記者 三重県士族 小林隆 同同区八幡町百二十二番地

発行人兼印刷人 東京府平民 桜河梅次郎 同日本橋区本町二丁目十番地